

## 各火山の 6 月の活動解説

### 【北海道地方】

#### 雌阿寒岳めあかんだけ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

15～16 日に実施した現地調査では、前回（2015 年 11 月）の調査と比較して噴煙の勢いが低下しているのを確認した。赤外熱映像装置<sup>1)</sup>による観測では、ポンマチネシリ第 3 火口及び、第 4 火口で地熱域の明瞭な縮小がみられた。赤沼火口については、噴気の勢いや地熱域に変化はなかったが、西方噴気孔の最高温度が上昇しているのを確認した。その他の火口については特段の変化は認められなかった。

雌阿寒岳ではここ数年、地震増加、浅部熱活動の活発化を示す全磁力<sup>2)</sup>の減少や 96-1 火口の噴煙量増加などがみられている。今後の火山活動の推移に留意が必要である。

#### 十勝岳とちかだけ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

19～22 日に実施した現地調査では、62-2 火口周辺では、引き続き熱活動が活発な状態が継続していることが確認され、その他の火口については特段の変化は認められなかった。

ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

#### 樽前山たるまえざん [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

28～30 日に実施した現地調査における赤外熱映像装置<sup>1)</sup>による観測では、A 火口、B 噴気孔群、H 亀裂東壁で高温状態が継続していた。

山頂溶岩ドーム周辺では、1999 年以降、高温の状態が続いているので、突発的な火山ガス等の噴出に留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山

であることに留意）]

大雪山たいせつざん [噴火予報（活火山であることに留意）]

倶多楽くつたら [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

有珠山うすざん [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

北海道駒ヶ岳ほっかいどうこまがたけ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

恵山えざん [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

### 【東北地方】

#### 秋田駒ヶ岳あきたこまがたけ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

女岳では、2009 年から拡大した地熱域が引き続きみられるが、2014 年 10 月以降は大きな変化は認められない。地震活動は概ね低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので今後の火山活動の推移に留意が必要である。

#### 蔵王山ざおうざん [噴火予報（活火山であることに留意）]

2 日に実施した現地調査では、丸山沢の地熱や噴気の状況は、前回（2015 年 11 月 13 日）と比較して特段の変化はみられなかった。振り子沢付近では、昨年（2015 年）みられていた温泉湧出箇所は高温域は認められなかった。

今期間は火山活動に特段の変化はなかったが、長期的にみると 2013 年以降火山性地震の増加や火山性微動の発生が観測されており、火山活動はやや高まった状態にあるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

#### 吾妻山あづまやま [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

大穴火口及び周辺の噴気活動や地熱活動はやや活発な状態が続いている。

遠望カメラによる観測では、大穴火口（一切経山南側山腹）の噴気の高さは概ね 100m 以下で経過し、噴気活動はやや活発な状況が続いている。

火山性地震は少ない状態で経過し、火山性微動は観測されなかった。

浄土平観測点の傾斜計<sup>3)</sup>では、2015 年 6 月頃まで西南西側（火口方向側）上がりの変動で推移し、2015 年 7 月頃から停滞していましたが、2015 年 9 月頃から西側下りの傾向となっている。

GNSS<sup>4)</sup>連続観測では、2014 年秋以降に一切経山付近の膨張を示す緩やかな変化がみられていたが、2015 年 7 月頃から停滞または収縮の傾向

となっている。

大穴火口付近では小規模な噴火が発生する可能性があるため、大穴火口周辺（火口から概ね 500m の範囲）では弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。

#### **磐梯山[火口周辺警報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]**

10 日に、山頂付近を震源とする地震が日回数 53 回と一時的に増加したが、そのほかの期間は概ね少ない状態で経過した。その他の火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

- いわきさん  
岩木山 [噴火予報（活火山であることに留意）]
- はっこうださん  
八甲田山 [噴火予報（活火山であることに留意）]
- とわだ  
十和田 [噴火予報（活火山であることに留意）]
- あきたやげやま  
秋田焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]
- いわてさん  
岩手山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]
- ちょうかいさん  
鳥海山 [噴火予報（活火山であることに留意）]
- くりこまやま  
栗駒山 [噴火予報（活火山であることに留意）]
- あだたらやま  
安達太良山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

#### **【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】**

#### **草津白根山[火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]**

湯釜火口の北から北東内壁及び水釜火口の北から北東側にかけての斜面で熱活動の活発な状態が継続している。東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス組成及び湯釜湖水の化学成分の火山活動の活発化を示す変化や、湯釜の水温が平年よりも高い状態が観測され、継続している。

小規模な噴火が発生する可能性があることから、湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石<sup>5)</sup>が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがあるので、注意が必要である。

#### **浅間山[火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]**

山頂火口からは、白色の噴煙が火口縁上概ね 500m 以下で経過している。

山頂火口で、夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映<sup>6)</sup>が 6 日から 12 日にかけてほぼ連日観測された。火映<sup>6)</sup>が観測されたのは、今年 1 月 3 日以来で、13 日以降は観測されていない。

2 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は 1 日あたり 200 トン、10 日は 1 日あたり 400 トン、24 日は 1 日あたり 700 トンと先月（5 月 12 日、90 トン）より、やや増加している。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震は引き続きやや多い状態となっており、火山活動はやや活発な状態で経過している。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石<sup>5)</sup>に注意が必要である。

#### **新潟焼山[噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]**

2015 年夏頃から山頂部東側斜面の噴煙がやや高く上がる傾向が認められ、12 月下旬からは噴煙量も多くなっている。GNSS<sup>4)</sup>連続観測では、2016 年 1 月頃から新潟焼山を南北に挟む基線で伸びがみられている。

5 月 1 日に振幅の小さな火山性地震が増加した後、火山性地震は次第に減少しているが、2015 年以降の地震回数は、2014 年以前と比べてやや多い状態が続いている。

今後も、想定火口内（山頂から半径 1 km 以内）に影響を及ぼすような噴火が発生するおそれがあるため、火山活動の推移に注意が必要である。

#### **弥陀ヶ原[噴火予報（活火山であることに留意）]**

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過している。

立山地獄谷では以前から熱活動が活発だったが、2012 年 6 月以降の観測で噴気の拡大・活発化や温度の上昇傾向が確認されているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

#### **御嶽山[火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]**

遠望カメラによる観測では、白色の噴煙が火

口縁上概ね 700m 以下の高さで経過している。

10 日に実施した山頂の現地調査では、二酸化硫黄は検出されなかった。

火山性地震は少ない状態で経過しているが、2014 年 8 月以前の状況には戻っていない。今期間、低周波地震を 2 回（5 月：3 回）観測し、火山性微動は観測されなかった。

2014 年 10 月以降噴火の発生はなく、火山活動は緩やかな低下傾向が続いている。火口列からの噴煙活動や、地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石<sup>5)</sup>に注意が必要である。

### **富士山 [噴火予報 (噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]**

2011 年 3 月 15 日に静岡県東部（富士山の南部付近）で発生したマグニチュード 6.4 の地震以降、地震活動が活発な状況となっていたが、その後、地震活動は低下してきている。その他の観測データでも浅部の異常を示すものはない。火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

### **箱根山 [噴火予報 (噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]**

大涌谷周辺での噴気の高さは概ね 400m 以下で経過している。火山性地震の発生は少なく、地震活動は低調に経過している。また、地殻変動観測では、特段の変化は見られていない。

一方、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気活動が活発なところがある。大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

### **伊豆大島 [噴火予報 (噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]**

火山性地震は少ない状態で経過している。低周波地震や火山性微動は観測されていない。

27 日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内にある中央火孔の最高温度は約 43℃で、1999 年以降ほぼ同じレベルで経過している。また、中央火孔内の地表面温度分布は、前回（5 月 20 日）の観測と比べて特段の変化は認められない。その他、三原山山頂周辺の噴気温度にも特段の変化は認められない。

地殻変動観測では、短期的な膨張や収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続

いている。その他の観測データには特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

### **三宅島 [噴火予報 (噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]**

山頂浅部を震源とする地震は概ね少ない状態で経過している。また、火山ガス放出量（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は、長期的に減少傾向にあり、2013 年 9 月以降は 1 日あたり概ね 500 トン以下で経過している。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は、5 月 12 日に 1 日あたり約 1,200 トンと増加したが、それ以降は減少しており、7 日と 27 日に実施した現地調査では、1 日あたりそれぞれ約 200 トン、約 60 トン（前回 5 月 24 日：約 100 トン）で、やや少ない状態だった。

3 日に実施した現地調査では、主火孔内及びその周辺で引き続き高温領域が認められ、前回の観測（5 月 24 日）と比べて、火口内の地形及び高温領域の分布に特段の変化は認められなかった。

主火孔における噴煙活動及び火山ガスの放出が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、山頂火口内及び主火孔から 500m 以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出が継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

### **西之島 [火口周辺警報 (入山危険) 及び火山現象に関する海上警報]**

これまでの観測によると、2013 年 11 月以降、西之島では噴石等を放出する噴火や溶岩の流出が続いていたが、2015 年 11 月下旬以降はいずれも確認されていない。2015 年 12 月以降は地表面温度の低下が確認されている。また、火口からの顕著な噴気はほとんど確認されていなかったが、海上保安庁や気象庁の観測によると、4 月以降噴気活動や火山ガスの放出が確認されている。

7 日に海上保安庁が実施した調査では、第 7 火口の火口内、火口縁及び火砕丘南側斜面に青紫色を帯びた火山ガスを含む噴気活動を確認した。前回の調査（5 月 20 日）と比較して放出量が減っており、噴気活動は縮退しているものと考えられる。

熱計測画像からは、第 7 火口の火口縁及び火砕丘周辺の溶岩原に地表温度の高い領域が点在していたが、前回の観測結果と比較して顕著な温度分布の変化や温度上昇等の特異事象は認められなかった。

西之島では、火山活動に明らかな低下が認め

られ、噴火の可能性はかなり低くなっているものの、火山ガスや噴気が時々観測されており、小規模な噴火が発生する可能性は否定できない。

火口から概ね 1.5km 以内では噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。

また、火口から半径 0.9 海里以内の周辺海域では、噴火による影響が及ぶおそれがあるので、噴火に警戒が必要である。

### 硫黄島 [火口周辺警報（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警報]

火山性地震はやや多い状態で経過している。GNSS<sup>4)</sup> 連続観測によると、地殻変動は隆起及び停滞を繰り返している。2014 年以降は、島の北部ほど隆起が大きい状態が継続している。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるので、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

### 福德岡ノ場 [噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報]

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福德岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では噴火に警戒が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

那須岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

日光白根山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

焼岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

乗鞍岳 [噴火予報（活火山であることに留意）]

白山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

伊豆東部火山群 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

新島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

神津島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

八丈島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

青ヶ島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

## 【九州地方及び南西諸島】

### 九重山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められないが、GNSS<sup>4)</sup> 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

### 阿蘇山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

中岳第一火口では、5 月 1 日に発生したごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。

2 日及び 10 日に実施した現地調査では、前月に引き続き中岳第一火口内に灰色の湯だまり、ごく小規模な土砂噴出、火口底に高温の噴気孔を確認した。湯だまりの量は、噴煙のため不明であった。15 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は、1 日あたり 1,900 トン（5 月：1,200～2,500 トン）と多い状態であった。

火山性微動の振幅は、3～9 日及び 24 日以降やや大きな状態で経過した。

火山性地震は少ない状態で経過し、孤立型微動は概ね多い状態で経過した。4 月 14 日以降は「平成 28 年（2016 年）熊本地震」による活発な地震活動が続いているが、阿蘇山の火山活動には、この地震活動に伴う特段の変化は認められなかった。

GNSS<sup>4)</sup> 連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む古坊中一長陽（国）の基線の 2015 年 8 月頃からのわずかな伸びの傾向は、2015 年 11 月頃から停滞している。中岳第一火口では、時々小規模な噴火が発生していることから、今後も火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>及び火砕流に警戒が必要である。風下側では降灰、風の影響を受ける小さな噴石<sup>5)</sup>及び火山ガスに注意が必要である。

### 雲仙岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は静穏に経過しているが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に注

意が必要である。

### 霧島山（新燃岳）[火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

新燃岳付近を震源とする火山性地震が時々発生した。

傾斜計<sup>3)</sup>では、「平成 28 年（2016 年）熊本地震」の影響により大きく変化し、その後は緩やかに変化しているが、火山活動によると考えられる変化は認められない。

GNSS<sup>4)</sup>連続観測によると、新燃岳の北西数 km の地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015 年 1 月頃から停滞している。また、新燃岳周辺の一部の基線で、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

新燃岳では火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、新燃岳火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石<sup>5)</sup>が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

降雨時には、泥石流や土石流に注意が必要である。

### 霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）[噴火予報（活火山であることに留意）]

遠望観測では硫黄山で時々噴気が観測されており、最高で火口縁上 30m まで上がった。

火山性地震は時々発生し、月回数は 38 回と前月（5 月：30 回）と同程度であった。震源は、主に硫黄山付近の海拔下 0～2 km に分布した。火山性微動は 2 月 11 日以降、観測されていない。

傾斜計<sup>3)</sup>では、「平成 28 年（2016 年）熊本地震」の影響により大きく変化し、その後はゆるやかに変化しているが、火山活動に特段の変化は認められない。

GNSS<sup>4)</sup>連続観測によると、えびの高原（硫黄山）周辺の一部の基線では、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

えびの高原（硫黄山）周辺では、噴気活動が続いており、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

火口周辺では火山ガスに注意が必要である。活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、注意が必要である。地元自治体を実施している立ち入り規制等に留意が必要である。

### 桜島[火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規

### 制）]

昭和火口では、噴火活動が継続した。噴火回数は 4 回（5 月：22 回）で、このうち爆発的噴火は 1 回（5 月：2 回）であった。噴煙は最高で火口縁上 2,000m まで上がった。3 日 00 時 21 分の爆発的噴火では、ごく小規模な火砕流が発生し、南東方向へ 400m 流下し、弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>が 5 合目（昭和火口より 500～800m）まで達した。

南岳山頂火口では、3 日 23 時 53 分に噴火が発生し、噴煙が火口縁上 1,500m まで上がった。

火山性地震の月回数は 126 回で、前月（5 月：164 回）と同様に少ない状態であった。

火山性微動の継続時間は月合計 1 時間 45 分で、前月（5 月：4 時間 15 分）と同様に少ない状態であった。

桜島島内での傾斜計<sup>3)</sup>、伸縮計<sup>8)</sup>による観測では、2015 年 8 月の急激な変動以降、顕著な山体膨張を示す地殻変動はみられていない。一方で、桜島島内の伸縮計では噴火の発生前にはわずかな伸張が、発生直後にはわずかな収縮が観測されている。

GNSS<sup>4)</sup>による観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の膨張を示す伸びの傾向が引き続きみられる。島内では、2015 年 8 月の急激な山体膨張の変動以降、山体の収縮傾向がみられていたが、2016 年 1 月頃から停滞している。

桜島では噴火活動が継続しており、地殻変動観測では始良カルデラの膨張が続いていることから、火山活動のさらなる活発化の可能性もあり、火山活動の推移に注意が必要である。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>及び火砕流に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石<sup>5)</sup>（火山れき<sup>9)</sup>が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

### 薩摩硫黄島[噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は静穏に経過しているが、硫黄岳山頂火口では噴煙活動が続いているため、火山灰等が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

### 口永良部島[火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）]←14 日に噴火警戒レベルを 5（避難）から 3（入山規制）に引下げ

口永良部島では、2015 年 6 月 19 日のごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。

火映<sup>6)</sup>は観測されておらず、新岳火口の西側割れ目付近の熱異常域の温度も低下した状態が続いている。

新岳火口付近の火山性地震は、2014 年 8 月の噴火前よりやや少なく、また火山性微動は観測されていない。

地殻変動観測では、新岳火口を挟む GNSS<sup>4)</sup>の基線長に、2016 年 1 月頃から縮みの傾向がわずかに認められ、5 月には明瞭になり、2015 年 5 月の噴火前から続いていた新岳の膨張状態が収縮に転じているとみられる。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は、1 月以降は 1 日あたり 50～200 トンで、2015 年 5 月の噴火前後より大幅に減少した値で経過している。

これらのことから、2015 年 5 月 29 日と同程度の噴火が発生する可能性は更に低下していると判断し、14 日 18 時 00 分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを 5（避難）から 3（入山規制）に引き下げ、火山現象に関する海上警報を解除した。

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は 2015 年 7 月以降、観測されていない。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は 1 日あたり 80～200 トンとやや少ない状況であった（5 月：100～200 トン）。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>7)</sup>は、2014 年 8 月の噴火前よりもやや多い状態で経過していることから、引き続き居住地域の近くまで影響を及ぼす噴火の可能性がある。

新岳火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>及び火砕流に警戒が必要である。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石<sup>5)</sup>が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

降雨時には土石流の可能性があるので注意が必要である。

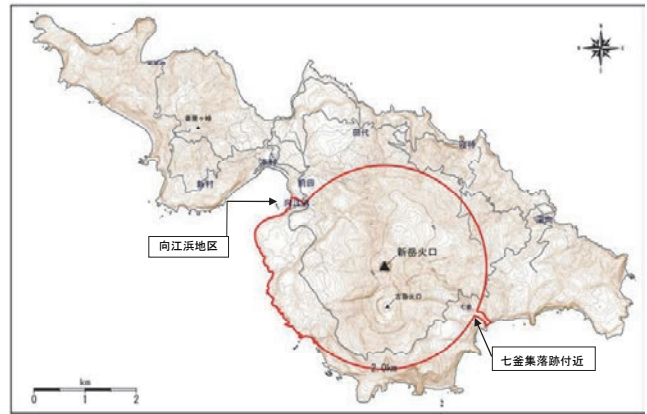


図 口永良部島 噴火に伴う大きな噴石及び火砕流に警戒が必要な範囲

### 諏訪之瀬島[火口周辺警報(噴火警戒レベル 2、火口周辺規制)]

御岳火口では、噴火が時々発生した。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>5)</sup>に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石<sup>5)</sup>が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

鶴見岳・加藍岳[噴火予報(活火山であることに留意)]  
霧島山(御鉢)[噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

- 1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
- 2) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
- 3) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
- 4) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
- 5) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
- 6) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
- 7) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。

8) 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。

9) 桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。